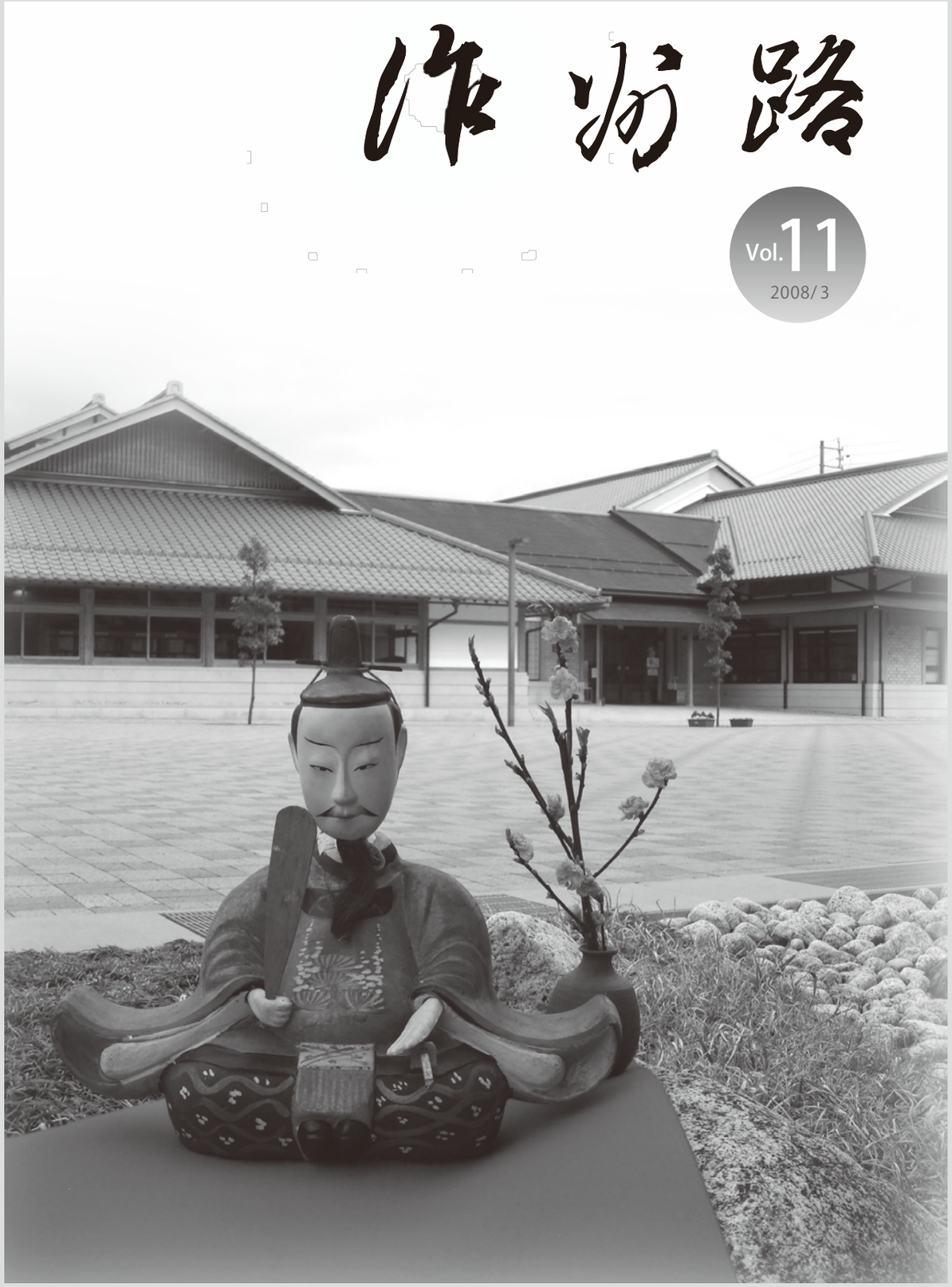
財団法人　美作学術文化振興財団

作州路

Vol.11
2008/3



勝央町植月地区で作られた〈植月泥天神〉男児の健康と学業成就を願い桃の節句に飾られた。背景は勝央図書館と美術文学館。

ー文化の薫る活力ある地域づくりをめざしてー　財団では、このような事業を行っています。

普及啓発事業

1. 財団ニュース「作州路」臨時号<『白野』公演>、11 号の発行
2. 普及講座の開催

陶芸入門講座（8 回講座）
期　日／平成 19 年 5 月
～11 月
会　場／勝央町公民館
・工芸室
参加者／ 24 名

子ども絵付け教室（2 回）
期　日／平成19 年7月 26 日
27 日
会　場／勝央町公民館
・工芸室
参加者／ 64 名

「陶芸入門講座」のようす

3. 事業協賛に伴うＰＲ活動
金時祭花火大会への協賛

芸術文化活動事業

1. 展覧会の実施

【主催事業】
■公募展の開催
公募展「第４回ミマサカコドモ絵画展」
会　期／平成 20 年 1 月 6 日～ 2 月 24 日
会　場／勝央美術文学館　町民ギャラリー 1・2

「第４回ミマサカコドモ絵画展」
会場風景

【共催事業】
■企画展の実施
勝央美術文学館企画展への共催事業
«文学»
「木村毅と明治 其の二
―明治文化研究会から明治村まで―」
「額田六福 vs 白野弁十郎」
「岡本綺堂の歌舞伎 其の二」
«美術»
「藤田嗣治の版画
―ポーゾル王の冒険を中心に―」
「郷土の画家ｼﾘｰｽﾞ ―素描と淡彩Ⅳ―」
こどもセレクションⅣ―小学校 1・2 年編―」
「五味太郎の世界展」
関連企画「ものがたりの絵」展
「郷土の画家ｼﾘｰｽﾞ ―日原晃没後 10 年―」
「SHOO チルドレンズ・アート・プロジェクト 2007
キルティング・ビー・母校」
巡回展「第 30 回瀬戸内版画展―勝央会場―」
「郷土の画家ｼﾘｰｽﾞ ―福島金一郎生誕 110 年―」
「第４回陶芸教室の作品展」

2. 地域芸術文化振興事業

【主催事業】
■演劇公演の実施
緒形拳ひとり舞台『白野』
会　期／平成 19 年 11 月 13 日 (火)
会　場／勝央文化ホール

【助成事業】
津山国際総合音楽祭
勝央金時太鼓保存会活動

【後援事業】
第３回しょうおう町民音楽祭
横仙歌舞伎四季の公演<冬>

その他の事業

1．文化財資料収集保存事業
2．学術的研究及び図書の発刊事業
等の事業を継続しておこなっております。

ご寄付をありがとうございました

日笠善勝
水野恭子
(50 音順、敬称略)

当財団は、皆様のご寄付により一層充実した地域芸術文化振興のための活動を実施します。

<寄贈作品>
有元呉洲作
「[鶴 (仮題)]」
1912 (明治 45)
和紙に墨

寄贈　日笠善勝

植月泥天神（うえつきのどろてんじん）

作州地方では、昔から男児の出生に際し、初めての桃の節句に親族や知人から<泥天神>をお祝いに贈る習わしがあります。(吉永義光著　岡山文庫『岡山のおもちゃ』1979 年）表紙の<植月泥天神>は、勝央町植月地区で生産されたもので、六代目植月伊右衛門（1717-1742）が作り始めたのが最初とされています。財団では、〈泥天神〉をはじめこの地方に残る伝統文化の収集、保存を行っています。

〈植月泥天神（岡山県）〉

編集後記

今年度は、十年来の念願であった郷土出身の劇作家額田六福先生の翻案による新国劇の舞台『白野弁十郎』地元公演を、希代の俳優 緒形拳さんのひとり舞台『白野』という形で実現することが出来ました。今回は、「出雲街道宿場考」も天児直美先生に「額田六福と出雲街道」をお書きいただき、六福先生をより深く知っていただける内容となりました。この場をお借りしてお世話になりました関係の方々に厚く御礼申し上げます。(E.N)

財団法人　美作学術文化振興財団
〒709-4316 岡山県勝田郡勝央町勝間田207-4　Tel. 0868-38-0270 ／ Fax. 0868-38-0260

発行日：2008 年 3 月 31 日
編集・発行：㈶美作学術文化振興財団
印刷：㈱廣陽本社

額田六福と出雲街道勝間田宿

天児直美
（勝央町 勝間田）

私は、平成 3（1991）年 3 月から 21 回に亘って額田六福のことを津山朝日新聞に連載した。それまで六福のことはよく知らなかった。調べていくうちにエライ人が勝間田から出たものだと思った。六福の戯曲を新国劇と沢田正二郎が次々と上演し、それが成功したこと、ことに翻案劇「白野弁十郎」は大ヒットし、六福の死後 50 年以上たって尚、島田正吾が「ひとり芝居」で演じ、それを引きつぐ形で、緒形拳が「ひとり舞台」として演じ続けられていることを思うと、私たちはもっともっと郷土の誇りとして劇作家額田六福のことを知り語り継がねばならないと思った。

六福は明治 23（1890）年、嘉十郎・八重乃の五男として勝間田町（現勝央町勝間田）に生まれた。生家北銭屋とよばれる質屋であり大地主で、隆盛期には内庭に米千俵積み上げたという。旧出雲街道の中央、現田村商店の向かいの家で、大正七年には北白川宮が宿泊されたという、りっぱな屋敷は、今は住む人もなく荒れるにまかせている。

額田家は代々芸事の好きな家系であったが、勝間田の町自体も遊芸のさかんな所だった。出雲街道ぞいに発展した宿場町で、早くから上方の文化が伝播した。ことに農村歌舞伎が盛んで「英田郡・勝田郡では歌舞伎について迂闊に物が言えない」と言われるほど専門の歌舞伎芝居が定着していた。六福が生まれた頃は農村歌舞伎全盛時代のことで、自然に親しんだ。そして六福自身も浄瑠璃をやり出した。立命館中学生の頃、六福が勝間田に帰ってくるとすぐ義太夫が始まる。合方として、近所の三味線弾きの“おじゅんやん”が呼ばれ、聞き手として近所の人たちがかき集められた。額田家のぼんぼんのこととて、嫌とも言えず二、三十人は集まった。額田家ではお客のために炊込みご飯を炊いてだしたという。

出雲街道沿いに残る額田六福の生家

恵まれて育った六福であったが、満 17 歳の時、右手の掌関節炎にかかった。結核性のもので、手術を受けたが、不具の身となった六福は、文筆で身を立てようと思いついたが、続いて脊椎カリエスが始まった。東大で診てもらったが体よく匙を投げられ、幽霊のような姿で帰郷した。この頃になって初めて脚本家になりたいと心が固まったという。『演芸画報』と山崎紫紅の『史劇十二曲』を唯一の教科書として読みふけった。しかし病気は悪化する一方で、家族は葬儀の準備までしたという。ところが不思議に持ちこたえて、次第に回復していった。命拾いをした六福は必死で勉強し、懸賞小説に応募して入選するようになった。

「演劇画報」で市川左団次のための新脚本が募集されていて、六福は応募したが落選した。しかしその時の選者であった岡本綺堂に事情を細々と書いて入門をお願いした。するとほとんど折返しに入門の許可の返事がきた。天にも昇る喜びで、それからは必死で勉強した。大抵一ヶ月おき位に一作書いて送った。先生からすぐ細かい朱註と総評がついて送り返された。そしてついに大正 5 年 3 月、家族を説得して上京、綺堂のすぐ近くに下宿して勉強することとなった。

この年の 9 月に早稲田大学英文科に編入入学した。六福26歳のことだった。その頃雑誌「新演芸」が創刊され、9 月に歌舞伎脚本の募集があった。六福は「出陣」という史劇で応募し、みごと一等入選となり賞金五百円を獲得した。

澤田正二郎演じる『白野弁十郎』
（早稲田大学演劇博物館提供）

翌年一月の歌舞伎座で、歌右衛門、仁左衛門、左団次など千両役者がずらりとならんだ豪華キャストで上演された。同じ頃「日本魂」という雑誌で「桜山」という史劇が一等入選し二百円の賞金を獲得した。賞金の額が破格であったことと、無名の新人の作が歌舞伎座で上演されること、作者が身障者の学生であることなど話題が多かった上、出版社の派手な演出もあって、劇団のトピックスとなった。むろん郷土の新聞でもデカデカと報道され、六福の長年の苦労がようやく実ったのであった。

六福は劇作家として華々しいスタートを切り、その後も「小梶丸」「月光の下に」「冬木心中」「真如」など次々と発表し上演された。しかし専門家の評判はあまりよくなかった。代表作といわれる「冬木心中」も江戸っ子の先生方に袋叩きにあった。師の岡本綺堂も「額田は江戸の世話物にまで大阪の浄瑠璃調を持ってくるから困る」とこぼしていた。

六福の戯曲は単純でわかりやすく、大衆性の強いものであった。この大衆性を買ったのが新国劇の沢田正二郎であった。新国劇は大正六年「芸術半歩主義」の理想を揚げて創立したが、惨憺たる失敗で都落ちしていたが「月形半平太」「国定忠治」などで成功を納めた。大正 8 年 7 月「小梶丸」が大阪弁天座で新国劇によって上演され、この一作で沢田との結びつきは決定的となった。翌年晴れて東京へ戻った新国劇は次々と六福の作品を上演した。中でも「白野弁十郎」は大成功で、菊池寛が沢正の白野を「近来比のない名演技」と絶賛した。

沢田は六福を評して「・・・時代趣味の常道を歩んでやまない額田氏の戯曲こそ現今民衆の興味のもっとも正確なバロメーターでなくてはならない。私が始終好んで額田氏の戯曲を上演し、かつその成績がよい所以は全くここにある」（日本戯曲全集解説）と言っている。この大衆性こそ、六福が郷土でつちかわれた体臭ともいえるものであった。しかし沢田との名コンビは長くは続かなかった。昭和 4 年 3 月、沢田正二郎は 36 の若さで急逝した。これは六福にとってひどい衝撃だった。その後の六福ほとんど新作が書けなくなり、昭和 5 年に創刊された岡本綺堂監修の演劇雑誌「舞台」の編集と後進の指導に情熱をかたむけていくのであった。

（あまこ　なおみ／正行寺住職）

額田六福略歴

1890 年 (明 23)	10 月 2 日勝田郡勝間田町（現勝央町）で、質屋で地主でもある父嘉十郎と母八重乃の五男として生まれる。小学校では成績が群を抜き級の首席を占めた。少年時代に病気で右手首を失う、また脊椎カリエスを病み作家志望の意を固める。岡本綺堂に師事し早稲田大学に学びながら劇作。
1917 年 (大 6)	雑誌「新演芸」歌舞伎座用脚本募集に応募した「出陣」が 1 等入選。翌年羽左衛門、左団次によって上演され、作家として認められる。続いて「暴風雨のあと」「小梶丸」が沢田正二郎」の新国劇にとりあげられる。
1920 年 (大 9)	早稲田大学を卒業。師綺堂の史劇の作劇法と作風をよく継いで、大衆の嗜好をつかむ舞台効果と俳優の個性を生かす役作りの巧みな商業演劇の作品を大正末期に至るまで歌舞伎、新派、新国劇のために数多く書いた。代表作に「冬木心中」「真如」「天一坊」「寛永遺聞」「白野弁十郎」などがある。
1948 年 (昭 23)	12月21日東京都杉並区阿佐谷で逝去。享年 59 歳。
1973 年 (昭 48)	勝央町名誉町民に追頌される。

緒形拳ひとり舞台『白野』が 勝央文化ホールで上演されました

11月13日（火）『白野』の上演に先立ち舞台稽古の合間に、緒形拳さんがこの舞台へかける想いを語ってくださいました。ここに、そのインタビューの様子を掲載いたします。

緒形拳インタビュー
日時／ 2007 年 11 月 13 日（火）
場所／勝央文化ホール
聞き手／野村英子（勝央美術文学館 学芸員）

野村：本日は、舞台稽古中のお忙しい中をインタビューに応じていただきまして誠に有り難うございます。
緒形：どうも
野村：それでは、まず、先程　額田六福と白野弁十郎の展示をご覧いただきましたが、緒形さんに縁の方のものも　いくらか出ていたと思いますが、ご覧になって如何だったでしょうか？
緒形：あのー、こう言うなんて言うかな、日本の文学史の中でね、あまり知られてないんですけれども、岡本綺堂先生とか菊池寛さんとか色々こう関わって来てね、僕の先生の澤田正二郎、辰巳柳太郎、島田正吾の筆跡が残っててね、小さくてでも温か良い展覧会というか良い部屋だったですね。
野村：ありがとうございます。緒形さんにそう言っていただけると企画した甲斐があります。
それでは、この『白野』という舞台ですが、島田正吾さんから受け継がれたということになると思いますが、その舞台にかける緒形さんの今のご心境をお聴かせください。
緒形：エーとそれは、澤田正二郎という人と、最初は「シラノ・ド・ベルジュラック」でやったらしいんですね。大正の初めにね、フランスのエドモン・ロスタンのね。失敗したらしいんですよ。それで、新国劇は日本の芝居ですから、日本のものでやったほうがいいんじゃないかことに。それで額田さん、同じ大学で、
野村：早稲田大学ですね。
緒形：それで、翻案を頼んだ。それが、なかなか見事な翻案で、澤田先生が亡くなられて、あの島田先生は『白野』を大詰めの手紙ところだけをやって、辰巳先生は、国定忠治の山の場をという解散劇のところですけれども、それを二人でやって。それから辰巳先生が亡くなって、それで島田先生が、淋しかったんでしょうね。独りでね、あの大詰めの部分を、後で僕やりますけどね、手紙を詠む部分がお好きだったみたいで、なんかっていうと、お酒飲んだりなんかして機嫌が良いとですね、「千種よー、さらばー、我はー今ー。」と詠い上げるんですね。で、それを亡くなられた今、あのー、このまんまだとやる人がいなくなる、もちろん額田六福さんも無くなるし、澤田正二郎も消えて無くなってしまうし、何よりも島田先生の思いみたいなものが僕にとって消えてしまうので、だから新国劇への思いだけですよ、これをやっているのはね。あの、僕の「学校」ですからね。何てったって初心に返るって言うんですかね。
野村：「学校」ですか。
緒形：「学校」。なかなか初心に返りようもなくて、どんどん歳だけくってっちゃうんですけど、現実として文化村から「何かやりませんか？」といわれて、「何かやりませんかっていわれて、そうだなー『白野』のひとり舞台はどうでしょうか？」てことで、3、4人の人の前で、あの、稽古したことがあるんです。台本を持ってね。行けるのか行けないのかあんまりはっきりと言わないんですけど、「あの、よろしくお願いします。」って僕の方からお願いして。それで、あの、文化村のコクーンの舞台が凄く広い舞台で、そこで『ゴドーを待ちながら』を串田和美さんとやったことがあるんですが、そので、そこで舞台を立て直して、その舞台が良い舞台が出来上がって思わず襟を正して。
野村：昨年、拝見しました。
緒形：白と黒で、床が茶色で仕掛けが良い舞台で、少なくともこの舞台に負けないように頑張ろうと思ったのが最初でしたね。この芝居は 1 時間 40 分くらいかな？一人でしゃべるもんですから、要求されるのが集中力だけなんですよね。で、わりと島田先生は、島田節といわれるような、台詞に節がありまして、「千種よー、さらばー、我は逝くー」という・・・。僕は、少なくとも現代人ですから、あんまり節を使わないで、その日その日の感情でやりたいなーと、それが、古典を現代に活かしていく、あの取っ掛かりとゆうか縁（よすが）というか、やっぱり現代に活かしていかないと。だから、緒形のはやっぱり変だから、節に戻そうという人が出てくるかもしれないし、古典というものが何代も何代もやり通していくものだから、そん中の通過点の一人ですよ僕はね。それは、やっぱり、最後ふーっと落ち葉が散る場面を見て「あー。島田正吾は偉大だったなー。」と「辰巳柳太郎は、凄かったなー。」と。で良い先生を二人持てて良かったなあと、しかも全然タイプの違う先生を。辰巳先生って言う人は、「何か芝居を教えてください。」と言うと、「教えない！こんなん見ておぼえるんや！」て言うんですね。「教えないんですか？」ていうと「教えない、手取足取り教えるもんやない！」て一蹴されるんです。島田先生は、「こーだろー。で、こーだろー。足を半歩出して、おはよう。とかって言うんだよ。」って凄んですよ。
野村：ご自分で、実際に手取足取りという感じですね。
緒形：はい、全く幼児に教えるが如く。で、両方の先生を尊敬していながら、両方の先生を「何だそんな違うだろ。」みたいな、生意気な生徒だったんですよ。えー、丁度二人の先生の一番良いとこだけ頂いていたっていうのが今日ご覧になる『白野』に少し活かされていれば良いなーって想うんですけれども。
野村：あの、この舞台のテーマというか＜男の心意気＞とか＜格好で生きる＞ということ。私は女ですから少し分からない世界でもあるのですが、昔は結構（そんな生き方をしてる男の人が）沢山居たのかも知れませんが、最近の風潮としては、中々そういう生き方って見なくなったような気がします。その辺りは、緒形さんは、如何でしょうか？
緒形：あの、それは昔も今も＜男は、心意気だ。＞と思いますよ。ただ、何故今『白野』かって訊かれればね、今どんどんドライな世の中になって、笑いが珍重されて、パサパサした説明過多の芝居が多い中で、日本人の持っている叙情と言うんですかね、リリシズムというか、それをしっとりと詠い上げている。それは大事にしてあげたいですね。（島田）先生は、一番最後を「男の持っているたった一つの宝は、兜の竜頭！」っていうんですね。辰野隆さんっていう人の翻訳にも「それは兜の羽根飾り」ってあるんですね。で、あの辰野さんの中の何遍か翻訳した中に、「それは、男の心意気」っていうのがあるんです。それはもう説明の仕様がないです。それは、心意気だよ。男も女も心意気さ。
野村：はい。有り難うございます。
あと、最後に一つだけ、今回東急文化村の舞台に緒形さん自身が、＜青蛙堂（せいあどう）＞という名前を舞台につけておられます。あえて＜蛙＞という言葉を使っておられますが、＜新国劇＞の方々はトレードマークにされたり島田さんなんかも自著に「ふり蛙」というタイトルを付けられたりされていますが、何か特別な思いがお有りでしょうか？岡本綺堂先生のご養子の方がなさっている出版社も＜青蛙房（せいあぼう）＞ですし･･･。
緒形：有るでしょう。あれを河童って読んだ人もいますから。で、僕は別に河童が特別好きでもなく、蛙が特別好きでもないんですけど、長い間＜新国劇＞では蛙がシンボルマークでですね、あの柳に蛙の。
野村：澤田正二郎さんがデザインされた…。
緒形：シンボリックなもので。その、たまたま青い蛙っていいんじゃないかなーて。青蛙（せいあ）っていう。
野村：青蛙（あおがえる）ですね。
緒形：ええ、心はいつもも青年の如く在りたいですよね。心は、ですよ。ただ、あの、もし出来うれば、この日本人の持ってるこのリリシズムをですね、やり続けていきたいなと思ってるですけれども。それこそ、呼ばれれば、日本国中何処へでも…。ただ、これもの凄く疲れるもんですから、未だに出の前は、五分間くらい上がるんですよ。で、その、未だに台本を持って歩いてるんですけど、途中で同じようなリフレーンする場面があって、で、何人も、五人出てくるんですかね？で、その会話の間にあのー「今朝此処で待ち合わせをしたんだ。」て言ってるのが、一体誰に言ってるのか瞬間分からなくなってしまったりなんかするんですけども、あの、一番そうですね大事なことは、『白野』に鼻を付けないってこと…。あの、そら（島田）先生に怒られると思うんですね。でも、それが敢えて、千種という女のひとの言う大事な台詞を、あの、「あなたの大事な一生を、私が誤らしたんだ」っていうその一生をどうしても、あの鼻をつけて「とおっしゃるんですね。」生声で瞬間そこだけ千種になって言いたいのと、それから＜白野＞だけがどうしてもスポットを浴びちゃいますけども、イケメンの来栖というあの…。
野村：はい。ある意味一番可哀想なひとですよね。
緒形：そうですね、はい。で、あの人、あの瞬間替わるところがあるんですけれども、そこんところ鼻をつけてたらどうにもならない。（島田）先生は、そこをそういう振りでやる、「というのかい。」とか、えー「今、おまえ千種に語り掛けようとしたけど、だめだったんだね。俺は見てたんだよ。」みたいな、それは説明なんですけれども。ただ、五人を一人でやるとなかなか芝居を見られなかったり、ちょっと取っつきが悪いんですよね。あの、テレビの影響で何でもかんでも説明しすぎて、あのー、分かりやすくお客様にですね、あのー、説明しすぎちゃうていう…。いや、それはそんなことは無くって、もう僕が出てったらお客様と僕とであの空間を一緒に作り上げていってね。僕も考え考え演るもんですから、お客様もよくよく考え考えご覧になっていただきたいなってね。一方的にこちらが押しつけるものでは無くってそれを受け止めて返していただくと、また来年のこの『白野』の活力になりますけれども。でも、来年何処もやるってとこが無いかも分かんないですけれども…。
野村：えっ。そんなことは無いと思いますよ！
あの。ほんとに何度も見て頂くほど内容が深まっていくというお芝居なんですね。
緒形：台詞って言うのは、どんどん時とともに流れて行っちゃいますけど「あんときの台詞もう一度聴きたいなとお思いになった方は、来年また是非ご覧頂きたいと思います。
野村：はい。有り難うございます。
どうも、今日は舞台前の貴重なお時間をいただき、本当に有り難うございました。
緒形：はい。ありがとう。
野村：この後の本番、頑張ってください。それでは失礼いたします。（終了）